


タイトル	粗朶(そだ)の生産と治水工事への活用	
概要	保全整備に寄与する粗朶生産と治水工事への活用	
管理方法・技術的視点	<p>粗朶とは、昔河川工事などで普通に使われていた資材である。現在河川工事で使われる粗朶は、直径5cmに満たない細い木を束ねて長さ2m70cm以上、直径20cm程度に縛ったもので、針葉樹を除く、里山の林に生えているほとんど全ての広葉樹を使うことができる。粗朶の束は昔から「柴漬け漁」という伝統漁法でも使われており、川に沈めておくだけでエビや小魚が入り込むことが知られている。粗朶を緩流部の床固め、水制や洗掘部下層の根固めなど河川改修に使うことによって、里山の林の手入れが進み、同時に川の生物相も豊かになる効果が期待できる。</p> <p>粗朶を使った粗朶沈床工法は、環境負荷の少ない工法でもある。標準的なコンクリートブロックを用いた工法は、高炉セメントや鉄筋を製造する際に大量の化石燃料を使うのに対し、粗朶は天然素材であるため、環境負荷が少ない。施工の際の材料運搬や、施工そのものに必要な環境負荷を、ライフサイクル全体のCO2排出量で比較すると、粗朶沈床を用いた工法の環境負荷は、コンクリートブロックによる工法の2744分の1と報告されている。また、耐用年数をコンクリートブロック50年、粗朶沈床を130年とした場合のライフサイクルを通じた費用は、コンクリートブロックでは廃棄費用と維持管理費用が生じるため、粗朶沈床を用いた工法の1.7倍が必要と試算されている。</p>	
備考	岐阜県立森林文化アカデミーおよび岐阜県では里山整備に関し、短期技術研修講座として里山整備団体等の研修を行っている。	 <p>粗朶(左)と河川への設置作業</p>
場所・主体	岐阜県大垣市上石津町など・岐阜県立森林文化アカデミー	
URL等	http://blog.forest.ac.jp/blog/2010/02/post_527.html	